ロハス・メディカル叢書（そうしょ）第1号
『救児の人々』
5月25日刊行

医療は人を助け、そして人に支えられて成り立つ。

――登場の豊島勝昭医師に著者が聴きました。

生まれたばかりの命を救い、そしてその後を支える新生児科や小児科、重症心身障害児福祉施設（重心施設）の医療者たち。子供と共に生きていく家族。その肉声を漏らさず綴（つづ）ったロハス・メディカル叢書『救児の人々～医療にどこまで求めますか』が、5月25日に刊行されます。著者の本誌論説委員・熊田梨恵が、登場する豊島勝昭・神奈川県立こども医療センター新生児科医長（41）にインタビューしました。

――取材を受けた本人として、この本を読んだ感想はいかがでしたか。

豊島　医療者と患者さんのご家族の声や気持ちを丹念に聞こうとしてくださっていたので感心しました。これまでご家族中心という書籍はあっても、医療者も両方というものはあまりなかったと思いますので、これまでにないような本じゃないかと思います。子供の命を支える身として、立場は違ってもそれぞれが思っていることを伝え合えるきっかけになればいいなと思いました。同じ医療者でも、小児科や重心施設の人とは大事にしている部分が微妙に違うので、その相互理解や協力のきっかけにもなるかと思います。僕たちは医療界の常識で動いているところがあって、改めてそのことを自覚させられるきっかけにもなりました。

――足りない福祉提供体制や疲弊する医療提供体制の狭間におられるご家族の喜びと苦しみの声を聞きながら、発達する医療の一方で「どこまで命を救っていくのか」と悩む医療者の姿も書きたいと思いました。その辺りについては

エコーで赤ちゃんの状態を見る豊島医師（中央手前の青い服の人）

豊島勝昭

とよしま・かつあき●1994年に新潟大卒業後、神奈川県立こども医療センターで小児科や新生児学を研修。98年から東京女子医大心臓血圧研究所で小児循環器学を研修。2000年に博士号を取得し、同年から神奈川県立こども医療センター新生児科勤務。

どう感じましたか。

豊島　（新生児医療について）「人の領域ではないと思った」と書かれていましたが、人間だから悩むし考えもするわけです。科学はすごい可能性があって、NICUだけでなく、どの医療分野でも向上を求めていくことができます。でも、医療や医学は、病気や障害をなかったことにしてくれるわけではありません。できるからといってどんどんと医療を駆使していいのか分かりませんし、患者さんやご家族も医療をどう使っていくか、医療への「接し方」やスタンスを考えていかないといけない時期なのかもしれません。

科学に流されたり溺（おぼ）れたりすると、かえって生きることがつらくなったり悩んでしまうことも起こり得ますから、自分の人生の中で医療とどう関わっていくか、考えないといけないと感じています。本来、医療は人を幸せにするためにうまく使いこなしていくべきものだと思いますから、医療者も患者さんやご家族も、死生観について考えて、人間としての芯（しん）を持たないといけない時だと感じています。そうしないと、医学の進歩と医療体制の劣化の狭間で苦しむ可能性が、どんな人にもあるのではないでしょうか？

早産「込み」で生きていくことを支える

――他にどんなことを感じましたか。

豊島　医療の発達によって、障害や後遺症を持つ人が増えているという見方も一部にはあります。ただ、30人に1人はNICUを必要として、10人に1人は未熟児と言われます。実際にNICUが必要な赤ちゃんは増えていますから、治療しなかったり治療が遅れたりして障害を持つこともあるわけです。大人の医療もそうですが、集中治療を必要とする時点で後遺症や障害を持って生きていく可能性があるのです。突然そんな状態になってしまわれたご家族が、なかったことにしたいという気持ちはお察しいたします。でも医療は万全ではなく、医学は万能ではありません。病気の症状を緩和したり、病気と一緒に生きていくのを手伝ったり。早産をなかったことにはできないけど、早産「込み」で少しでも生きていきやすいようにお手伝いをしていくということなのかなと、この本を読んで改めて思いました。

――現代社会が失っている死生観を取り戻すことが必要でないかとも書きました。

豊島　僕たち社会全体が、医療に何を求めるかなのだと思います。救命率の向上を求めていくなら、ひたすら治療をしていくことになりますが、どう生きるかということや、ご家族や患者さんの笑顔を大事にしたいと思ったら、残された時間をご家族が一緒に過ごせるように治療を差し控えるということも考えられますから、救命率は下がるかもしれません。これからは、救うという時にその後の生活がどうなるかということも一緒に考えていくことが必要な社会だと思います。これは、一人ひとりが死生観をどう持ち、社会全体が何を求めていくのかということに尽きるのではないでしょうか。

例えば障害者を「かわいそう。社会が支えるべき」と言う人もいますが、その社会とは誰なの？　それを言っている自分たち一人ひとりではないの？　と思います。医療は社会の一部であって、特別なものではないです。医療は人を助けますが、医療も人に支えられないと成り立たないのです。医療者だけが決められるものではありません。命を守っていくために、限られた医療資源をどうみんなで譲り合って共有していくかということも、みんなで一緒に考えていく必要があると思います。